研究課題　高野山伝来聖教奥書集成にむけての調査・研究―平安・鎌倉時代を中心として―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　藤本孝一（龍谷大学）

　所内共同研究者　渡邉正男・高橋慎一朗

　所外共同研究者　坂口太郎（高野山大学）・土居夏樹（高野山大学）・野田悟（高野山大学）・木下浩良（高野山大学）・大河内智之（和歌山県立博物館）・小林雄一（漢字文化研究所）

研究の概要

（１）課題の概要

　近年、日本中世史の分野では、寺院史料の重要性が強く認識されつつある。とくに、南都仏教や真言・天台宗の寺院に伝来した聖教には、仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会史・文化史に関わる内容を持つものが多く、豊かな可能性を持つ史料群と言える。 本研究は、高野山の主要な子院に伝来した平安・鎌倉時代の聖教を研究対象とし、調査・検討を進めるものである。高野山の聖教は、明治以来、多くの調査がなされてきた。しかし、子院伝来の聖教は、古文書に比してさほど情報公開が進んでおらず、研究の促進に繋がっていない。とりわけ、聖教の研究を進める上では、奥書情報の把握が不可欠であるが、既往の調査成果がほとんど学界で共有されていない上、調査未着手の聖教も数多く残っている。 そこで、本研究では、金剛三昧院・西南院・三宝院・持明院・真別処などの子院に伝来した聖教（西南院以外の聖教は、高野山大学図書館に寄託中）の調査に取り組む。とくに、奥書類の翻刻・集成を通して、今後の研究者による聖教調査・研究の基盤を整える。さらに、平安・鎌倉時代の密教史に関わる重要な聖教にも、できるかぎり個別的な検討を加える。

（２）研究の成果

　新型コロナウィルス感染症の拡大が止まないため、当初の研究計画を縮小せざるをえなかったが、研究代表者の藤本と共同研究員の坂口が協力しながら、調査・研究を進めた。とくに、西南院聖教や金剛三昧院聖教（高野山大学図書館寄託）を調査して、平安・鎌倉時代の識語・奥書類を抽出した。その過程で、鎌倉後期の証道房実融（金剛三昧院長老、意教流証道方の祖）が写した『祈雨』や、小島流聖教の『聖天』などに、多くの紙背文書が含まれていることが判明した。とりわけ、後者には永仁三年（一二九五）の「西園寺実兼御教書」などの讃岐国関係文書があり、史料的価値は非常に高いと考えられる。  
また、従来から取り組んでいた重要文化財『西南院文書』の翻刻を続行し、第四巻の翻刻を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三二号に発表した。さらに、二〇二一年一月に金剛三昧院経蔵で見つかった棟札四枚を調査し、①正応四年（一二九一）六月一日、②明応五年（一四九六）五月一六日、③永正一七年（一五二〇）七月七日、④寛永元年（一六二四）四月五日の年紀を持つ銘文を確認した。①②③は経蔵（国指定重要文化財）、④は客殿（同上）の棟札であり、とくに①は高野山最古の棟札の可能性が高く、きわめて貴重である。これらの棟札によって、貴重な聖教を伝えてきた金剛三昧院経蔵の沿革（修復や移転）が明らかとなった。  
なお、上記の棟札については、『毎日新聞』和歌山版で取り上げられた（二〇二二年三月一三日）。金剛三昧院の経蔵やその伝来史料の価値に対する社会的認知度を高める上で、有意義な記事であった。関係各位に深く感謝したい。